

〔学会記録〕

東日本学園大学歯学会第3回学術大会

(昭和59年度総会)

— 一般講演抄録 —

(昭和60年3月2日, 歯学部476講義室)

1. 病棟開設から現在までの口腔外科

— 入院患者の臨床統計的観察 —

原田尚也, 和田敏亮, 松崎弘明,
谷内健司, 養輪隆宏, 道谷弘之,
武田充弘, 額賀康之, 金澤正昭,
村瀬博文*, 堀越達郎*,
(口腔外科Ⅰ・*口腔外科Ⅱ)

本学付属病院棟が昭和55年6月に開設されて4年6カ月が経過した。今回われわれは当科における現在までの入院患者を集計し臨床統計的観察を行ったので報告した。
対象:昭和55年6月1日より昭和60年1月31日までに当院病棟に入院した患者のうち口腔外科より入院せしめた患者272名を調査対象とした。

結果:当科における入院患者は入院者総数のうち74.3%であり, 年齢別では20歳代と10歳代がほぼ同数で上位を

しめていた。疾患別症例数は多かった順に嚢胞, 腫瘍, 顎変形症, 外傷, 炎症, 顎堤萎縮が主なものであり, このほかには全身疾患を有する患者の歯科治療も多くみられた。また入院日数の平均は23日であった。さらに病棟開設以来新患者のうち入院せしめたものは2,958名中272名で, 9.2%を占めた。入院患者の地区別分布をみると, 石狩空知管内はもとより函館, 釧路, 稚内と全道多岐にわたっていた。

2. 過去5年間の歯科病棟の看護経験とその考察

須見登志子, 堀田美穂, 大釜幾久恵,
鎌田優子, 和気愛子 (附属病院看護部)

今年1月末までの4年6カ月間の入院患者数は336名である。入院患者は主に口腔外科的疾患で手術を目的とする患者と何らかのハンディキャップを持ち, 全身麻酔下で集中的に歯科治療を受ける患者に大別される。今回は口腔外科看護の中で顎間固定を施行した患者の食事について看護記録と患者の食事感想欄から食べづらい原因は口が開かないことだけでなく吸引運動や燕下運動が制

限されることが大きな要因であることが知られた事を報告した。障害者歯科の看護では障害の程度や日常生活を観察した結果コミュニケーション障害があり家族が付き添う意味を考察し合わせて患者と家族を一体とした看護目標を①予測される危険の除去, ②無理強いして恐怖心を与えない。③ブラッシングに慣れるようにする。④全身麻酔前の指示の遵守。を挙げ報告した。